

バイリンガルなネコと モノリンガルな日本人

北村 豊

幸か不幸か、この世にヒトとして生を享けた私は冬眠はしないので、皮下脂肪を落としたいが、前期高齢者のレツテルがあと2年で自動的に貼りかえられる私にとつては、書齋に大事に保管している多数の書籍などを早く断捨離したい気持ちも強く、そこにこもって整理を始めてはいるが、

座り込んで読書モードに入り込んでしまうことが度々ある。先日も、有名な生物学者で現在、青山学院大学教授の福岡伸一さんが2008年に出版された「できそこないの男たち」という生命科学の新書を取捨選択のためのつまみ読みをしていて、この著者が国際学会で教えてもらったという興味ある小

話に惹かれてしまった。その話とは：

ある日、ネズミが路地を警戒しながら歩いているとネコに遭遇した。ネズミの姿を捉えたネコはいきなり猛ダツシュしてきたが、俊敏なネズミは知り尽くした細い通路を縦横無尽に走って、ネコを振り切ろうとしたが、ネズミはとっさの機転を利かせて小さな穴に飛び込んだ。

「あつ、あれはイヌのジョン君の声だ。助かった！」と思い、お札を言うために外に出たネズミはネコの鋭い爪で押さえつけられたのです。

「あれ？ジョン君はどこ？助けに来てくれたんじゃないかったの」意地悪なネコは勝ち誇ったように言いました。「きょうび、2カ国語くらいはしゃべれないと世の中やっていけないのさ」

この小話に深くうなずいた私であったが、窮鼠猫を噛んだかどうかは知らない…。

この小話の結語は、私が参加しているいくつかの学会にもあてはまり、日本口腔外科学会でもかなり以前からイングリッシュセッションが設けてあつて、その会場での発表、質疑応答は全て英語で実施するルールとなつており、通訳やイヤホンの貸与は既に過去のやり方となつてしまつて

いる。

私は、たまたま昭和26年に全国で初めての英語科が設置されたという事実を知らないで、その奈良の高校で学ぶことで大きな恩恵を受けた。英語が特に出来たわけではないが、交換留学生らとのつたない会話を経験してコミュニケーションの喜びを知つたのである。

それをきっかけに4カ国語を話せるようになった私の人生はとも豊かになったことは事実である。

日本人にも、ポリグロットとまでは言われないが、バイリンガルなネコ“には是非なつていただき、より実りある人生を過ごしていただきたいと願っている。

（上高井郡小布施町信州口腔外科インプラントセンター所長）